

立原道造全集

第五卷

書翰

立原道造全集

第5卷

書翰

1973年2月10日 初版發行

著者 立原道造

發行者 角川源義

印刷者 中村武

製本者 鈴木俊一

發行所 角川書店

東京都千代田區富士見2の13の3郵便

番號102 TEL 東京(265)7111(大代表)

振替東京 195208 信教印刷・鈴木製本

亂丁・落丁本はおとりかへいたします

0395-572305-0946(0)

目 次

昭和二年（一九二七）——昭和八年（一九三三）	五
昭和九年（一九三四）	壹
昭和十年（一九三五）	七
昭和十一年（一九三六）	一七
昭和十二年（一九三七）	二五
昭和十三年（一九三八）	三三

解 說
編 註
書翰索引

四三
四三

昭和二年（一九二七）——昭和八年（一九三三）

十四歲

二十歲

昭和二年（一九二七）

十四歳

一 七月二十八日〔木〕 立原光子宛（東京市日本橋區橋町三丁目一番地） 東京澤井局發 〈封書〉
拜啓
お身體如何ですか。

達夫が歸りがつて居りますがどうしたらよいでせう。
お返事下さい。

山に着きました。お天氣はようございます。東京は暑いことだったらうと思ひます。

二十七日、晴

山に着く。七代の瀧に行く。天狗岩の途中滑つて困つた。歸り種々の葉をとつたがしほれてしまつた。夜宮杉君とベイスボールをした。夜九時半就寢。

達夫眠れずに十二時目ざめしとの事、

二十八日、晴後雷あり、

朝日の出を拜す。壯觀なり。

澤の流れにて顔洗ふ。氣持よし。

富士峯へ行く。足駄の爲下りに難澁。中食後澤にスケッチに行く。本日秋山といへる家の寫生をす。手紙を書きつ

つあり。雷はげし。達夫下に行く。

今日はお不動様ですね。

御縁日ですから盆栽でもお求めになつたらいかゞですか。では失禮いたします。

お身體お大切に、

さよなら

山にて不動様の縁日

道造記

母上様

二伸、達夫のことは大丈夫です。

注文、何か面白い本達夫と僕も欲しいです。お願ひします。

二 八月三十一日〔水〕 橘宗利宛 〈後1〉

拜啓

邊りの緑愈々濃く、空さへ鮮かな紺青見せて、心自ら躍る盛夏の候をつい昨日と思つてゐる間に早や朝夕の風は秋

の淋しさを告げんとする初秋の候となりました。残暑未だ去らず日中の暑さ、盛夏と變らねどその風吹くを聞く時は、早秋の涼しさそぞる感じられます。

この秋に當り先生御身體如何ですか。謹んで御伺ひいたします。

小生も今夏は東京の暑熱と戦ひました。休み前よりは黒くなつた事は確實です。

併し、少し許りの日數（二日）で富士五湖（本栖湖を除いた四湖しか見ませんが）廻りと田舎のお盆に行つたのとそれから御嶽（武州）に登攀した事は例外ですが。

夏、あの雄壯なる山の眺望、勇しい白波を岩頭に碎く海の壯觀、夏といふ言葉に平素親みにくい自然の大觀を想像せしめる力が有るかと思ふ位、この休みの四十二日が訪れる前には、暑い日向を學校から家へ足を運ぶ時にはよく、夏といふ言葉から、夏の長い休みさうして其の間有り相な事を聯想したのでした。兩國橋から、隅田川を眼下に見下し、川の上を吹く割合と涼しい風を受け乍ら、時々波がキラキラりと光るのを見ては、去年那古の海を訪れ一夏を過した事等思ひ浮べ、さうして今年も行かれるだらうと考へ、頭の中をいつばいにしてゐた事も、もう遙か彼方に過ぎ去り、早や夏休み、長いと思つた夏休み今日はそれが終らうとしてゐるのです。

今夜一晩明くれば、明日は、學校また一學期と同じ事を

くり返す、その第一頁が開かれる第二學期の始業式です。心には四十二日會はなかつたお友達の顔が映じて來ます。それから、先生のお顔・お話、心を盛に想像します。否、追想するのです。さうしてまた來るべき二學期の狀況を空想してゐるのです。

芥川先生の死、夏休みが始まると直ぐ起つたあの出來事、僕があつた事を知つたのはその翌日、何氣なく朝の新聞を開いた時でした。すると、どの新聞も「或る友人に送る手記」の全文、抄出思ひ思ひに掲げ、在りし日の氏の寫眞、さうして氏の略傳を添へて有つたのでした。三中出身、僕の今學んでゐるこの學校の先輩さうして、文壇の鬼才だつた先生の御魂永久に安かなれとお祈りをいたしました。

併し、どうしてあんな偉い先生が、またどうして自殺なんかなさつたのでせう。さうはいふもの、偉い先生だから人生の奥底までみつめられ、人生といふものに對して或る淋しい感、自然と比べて短い命を嘆かれああいふことをなさつたのでせうか。

二十九日（八月）の「子供の時間」に傳田先生の童謡があつた様でしたが、傳田先生のお作りになつた童謡、聞いた僕の心は異様な感を覺えました。「新修漢文」の講義をなさるあの眞にまじめその物の様なあの先生の童謡。本當に或る感じにうたれました。

今日かうして先生に僕はお手紙を差し上げようとペンを

とつてゐますが、これが先生に差上げた學友諸君の手紙の
殿^{しんが}りをつとめて、最終の手紙だらうと思つてゐます。他の
諸君の様にきれいな字、美しい文さへ持つてゐればもつと
早く書けたらうと思つて居りますが、下手なため遅れて誠
に相濟ませんでした。

この手紙が着くのも學校がはじまつてからと思ひますが、
取敢へず午前（三十一日）投函します。

では何れ明日お目にかからしていただきます。

お身體御大切に、皆々様よろしく、さよなら

夏休み最終日に

立原道造

橘宗利先生様 玉机下

昭和四年（一九一九）

十六歳

三月二十三日〔土〕 立原光子宛（東京市日本橋區橋町三丁目一） 千葉流山局發（端書）

拜啓、 母さん、御岳に居た頃、よくこうやつて葉書を鉛筆で書いて出しましたね、あの頃から考へると背も高くなりましたし、いろ／＼なことが、わかるやうになりましたよね。けど、僕はひとり他所へ出ると、あの頃の氣持になるんです。今晚だつて、こうやつて鉛筆で書くのも、その氣持のあらはれです。だから、讀みにくくつてもおこないでね、おねがひです。

何にも書きたいことがないのに今晚も書いてます。母さんも今頃は、お帳面をおへてねる用意でせう、お湯へ入つて居るでせう。僕は寢床に居ます。僕、母さんから手紙が來ないのが淋しいんです。最初のが、おそかつたからかしら、待ち遠いんです。母さんの手紙讀めないといつまらないんですよ。母さん、ひまがあつたらどうか出してよね、明日の朝つくかも知れないけど。今はないんだもの。淋しいんですもの。成績どうでせう、明日ね。達夫とりにやつてね。今晚は達夫に手紙出さないけど、いいでせう。この次

に出すから。母さん、僕お彼岸すぎたら平方へ行きます。それから一週間位行つてますよ。

二十二日の晩

母さんへ

おや、おやすみなさい。 僕より

四月 三月二十八日〔木〕 立原達夫宛（東京市日本橋區橋町三丁目一） 千葉流山局發（端書）

達夫や、お前何してる、僕、時々思ひ出すんだよ。所がわかつてるだらうから手紙をおくれよ、僕淋しいんだからお前のことを知らない。早くね。

今日は嬉しい日だつたよ、色盲——知つてるだらう、色がわからない人さ、シキモウと讀むんだよ。——色盲みたいても、僕が、その實物に對して、熱しきつた氣持を、繪に描けたんだもの。思ふ通り、今迄の氣持なんか考へずに描いたよ。嬉しいものだね、心の中を出し切るのは。止さう。お前にはよくわからないだらうけど、かまはないんだよ。こんな微妙な氣持は六つかしいから。

それから、今日は歛を持つて見た、重かつた、すぐ止したよ。それから、裸足——この字は跣足も書くか知れない。——になった。日向でごろ／＼して居た。

ラムプの下で書いて居て、あきたから、外へ飛び出したよ。いい星だつた、月があつて邪魔だつたけど。ぢや、おそくならない中に止すよ。お前もお休みね。母さんとふたりぢや淋しいかい。さー、おやすみ。

僕から

五 五月八日〔水〕 立原光子宛（東京市日本橋區橋町三丁目）
一 千葉流山局發（封書・二枚）

母さん！ 今日はいそいで書きます。

今朝は散歩しました。——遠くまでね、一時間も歩いたから、小一里歩いたと思ひます。ずの分歩いたでせうね。おどろきなさい。

達夫が来てうれしいでしたよ。フランスパンを持つて来て！ おいしいでした。おすしもね。

母さん！ まむしのくすりをのんで居ます、安心して下さい。あれものんで居ます。

母さん！ 小包、おくつて下さいましたか？
どうぞ、早くおねがひ致します。

もうぢき郵便やさんです、

おやすみなさいね。

母さん、

僕より、

この手紙と同封の封筒が大好きです。
氣に入りました。もうぢきなくなります

〔七日〕

六 五月十一日〔土〕 橋宗利宛（後↓）

拜啓、先便では失禮致しました。

今日は、大英斷で、左から横に書きました。國語の先生に左横書は、變ですが、これでない手が、書いたばかりの所をこすつて、汚くしてしまひさうですから、これにすることを決定致します。

今日は方言に對する私見とこの頃の自分の感想で、先生に御迷惑をおかけします。

××× ××× ×××

方言の中、今までの單語（自分の知り得た）の意義と語源（らしいと考へること）について。

らんみやく〓ちらかつて居ること。（亂脈）

ひつぱく〓さしせまつて居ること。（逼迫）

くげん〓病氣で苦しいこと。（苦患）

じんぎ〓遠慮すること。

ゆて〓お湯に入るときつかふ手拭。

でろ 〓どろ。
 ちやのこ 〓朝飯。飯。
 けえろ 〓蛙。とのさまがへる。
 おたまつこ 〓蝌蚪。
 かくてん 〓かんでん。
 ねらゆ 〓熱く煮立ちたる湯。
 せど 〓うら。
 あかげろ 〓赤蛙。
 あまげろ 〓雨蛙。
 ちつこ 〓乳。
 どうどう 〓馬を子供が呼ぶときいふ。ひんひん。
 かまや 〓火をたき、御飯等を作る所。(釜屋)
 むすこ 〓長男をいふ。
 むすめ 〓長女をいふ。
 おぢい 〓次男以下をいふ。
 おばあ 〓次女以下をいふ。
 ちゃん 〓父。
 たな 〓ものを賣る店一字に二軒位ある。
 よぎ 〓夜具。(夜着)
 とば 〓小刀。
 しつこゆび 〓小指。
 やぶ 〓歩く。
 ふつたける 〓たきつける。

つける 〓のせる。(つっかけるの約音)
 つっかける 〓のせる。
 おんなびる 〓なびる。
 いかい 〓大きい。
 いらい 〓大變なものである。(これについて後にいふ)
 いら 〓大變に。(前同様)
 まさか 〓非常に。
 べえ 〓ばかり。

××× ××× ×××

「あさがけにきられてまさかいそがしいですねエー」
 「あさはやくからきされてまさかいそがしいですよねエー」

以上の二例は同じ意味をいふものである。かうした文に吾人は、ここに、「來」の未然形の變格的用法並びに受身の助動詞の變つた用法と「まさか」の用法とに興味をひかれる。この二例の中で、上のは、老人のつかふことばと見え(即、年の古きもの)、この地方の若い人々には妙にきこえるさうだ、これは殆ど今ではつかはれないとのこと故、相當に面白いものと思つて居る。

「あさがけに」は、「あさがけ」(朝駈)。朝早く外出すること―辭林―からのもので、「朝早くから」といふ意味で

ある。東京の口語ではいはると同様に、現今では、この地方でもいはれて居ない言葉である。

「きられる」、これが問題なのである。

此の附近の人はこのことばに妙なアネクドットを持つて居る。「きられる」の「斬られる」に通じるため、上の話はまた別の意味になる。といふのは「朝早く、あの人が斬られたので、それは大變、手當でなどいそがしいんですよ。」といふをかしい變り方となる。所で、これは「来る」の未然形「こ」の變つたものであり「きない」と同じやうにつかはれて居るのである。「きられる」は「こられる」である。これならば、意味がつく。東京でも「朝早くからこられちやつて、どうもいそがしくつて」といふやうなことはいふ。これで、「きられる」のことは、かたがついた所が今度は「きされる」といふのがある、これがまた少しむづかしい問題である。どうこれがなつて出て來たのかは、なかなかわかりさうにもない。もう少し研究の要があるから、この次、發表の際まで、お待ちが願ひたいものである。「まさか」の用法の誤りなることは、「とても」同様である。種々の古い文は讀んだことが少いから、いつ頃からかうした誤用があるのかわからない。

俳句（蛙に關する俳句その他を蒐集したことがあり、そのとき見たもの。蛙の俳句四〇〇近く蒐集してあります。）では、「とても」の如く見ることが出來なかつた。

（尤も「まさか」を採したのではなかつたからかも知れませんが。）併し、東京で「とても」が行はれる以前から行はれて居たらしい。皮相な觀察かも知れぬが、東京に於て、老人たちは、「とても」の誤用を知らぬにせよ、濫用はして居ない。而るに、「まさか」は老人などが濫用し若い者は「とても」にうつらうとして居る傾向が見える。老人をかうした場合に考へるのは、老人が、相當頑強な態度を持つて新しい言葉をきらふから、比較的にその言葉の古さを考へられると推定したからであるが、或は、「まさか」の使用はさう新しいものでないことは立證せられるかも知れないと思ふ——今から四〇年前に存在して居たことは、これによる方法が正しいとすれば、明らかである。それ以前にも存在して居たかも知れない。「まさか」の歴史的の考察（？）は以上の如くである。

この二例により、方言が比較的早く變遷して居ることがわかると思ふ。

而して、この地方は東京語に傾向をうけて、だんだん變つて居るやうにも見えるが、「來される」の如く、ますます、はなれて行つたのがあることも認めねばならない。

助動詞「めえ」について。

1 「めえ」はいふまでもなく、「まい」の變化したものである。その變化は、この「まい」の「ま」が母音變化で「め」になり「い」は同じく母音變化で「え」の音となつた

のである。「い」と「え」の混同については後に述べる。）

なほかうした「めえ」は江戸の言葉にもあつたやうに覺えて居る。そして「めえ」は一般にひろくいはれて居て何のかはつた所がない言葉であるやうに思はれる。併し、この地方では、それ自身にでなく、接續に於て非常に珍らしい現象がおこり、判斷に苦しむのである。

2 「めえ」は未然形から連なる。「まい」は終に、こんな奇現象を呈した、非常に面白い現象である。だが、果して未然形であらうか、また母音變化の結果であらうか、ここが判斷に苦しむ所以なのである。

例 1 いいやそんなことは知らめえ。

2 いや、きのふは行かめえよ。

3 なーに。そんなことあらめえ。(以上三例)。

以上の三例の如く用ゐられるのである。

だが、これだけでなく、「行くめえ」「知るめえ」「あるめえ」も用ゐられ、音便の「知んめえ」「あんめえ」も用ゐられて、全く混沌として居るのである。これについて、ここで二様の考へ方が出来る。

「i」「あらめえ」本地方の言葉で、「あるめえ」は段々東京の方からはいつて來たもので、「あんめえ」もそれから出來たと考へる。

「ii」「あるめえ」が本から存在して居る。「る」の母音變化が「あらめえ」になり、同時に「あんめえ」が出來た

と考へる。併しこの二様の考へ方も、文法の初步を習つたばかりの自分の淺薄な頭から考へ出したので、これを立證したりなんかしてもむだなやうな氣がする上に、どうやっていいか、見當がつかないから、これはこれだけにとどめて、後のことはどうぞ考へていただきたい。(生意氣な言葉でございますが、かういはないと前からのと調子が合はないやうな氣が致しますので、かう書いたので、びくびくして居りますから、どうぞおゆるし下さい)どつちも、たよりがないやうに當人も思つて居るが、「ii」の方が考へよいかも知れない。

この問題については、用例とかうしたつかひ方の存在することの報告だけにとどめておくことにする。それ以上はわからない。

× × × × × × × × × ×

命令の「せえ」について。

例 まんま食べせえよ。

早くこつちへ來せえよ。

學校へ行きせえよ。

そのまりをけりせえよ。

その本を見せえよ。

早くしせえよ。

命令の「せえ」がある。これは、いい考へが浮ばなかつた。

(以上六例)。